

# くらし・家庭

## 少女マンガと ジェンダー

中川 裕美 ⑧



戦前の少女小説から現代の少女マンガまでをたどった中川裕美さんの著書『少女雑誌に見る『少女』像の変遷』(出版メディアパル)

本連載では、個別の作品を例にしながら少女マンガをジェンダーの視点から読み解いてきた(表)。最初のストーリー少女マンガ作品である手塚治虫の『リボンの騎士』以降、初期には男性作家しかいなかったが、やがて女性作家も登場し、作品が描く対象も男女の恋愛・歴史・SFなど多様に広がり、少女マンガはさまざまに変化してきている。

### 時代を反映した作品たち

入ることが当たり前のようになっている。ところが99年の『NANA』においては、小松奈々がひたすら「お嫁さん」を指し安定した人生を望むのに対し、大崎ナナは「ミュージシャンになる」という夢を目指すこと引き換えにさまざまな苦しみを抱えるのであり、あたかも人生が二択一

であるかのように描かれている。また少女の身体という視点では、53年の『リボンの騎士』や60年の『星のたてごと』などの初期作品では男女が肌を触れ合わせる描写止まりであったのに対し、『神風怪盗ジャンヌ』や『NANA』では性行為が自然に描かれている。さらにはこの2作品では、その後にくる「母になる」というテーマも描かれるようになってきた。

影響は双方向に、しかしながら、作品の方向性が読者の嗜好や社会の風潮によって左右されるだけではない。作品の伝える内容もまたさまざまな面で読者に影響を及ぼすのであり、作品と読者は常に双方で影響し合っているのである。このことを強く意識していたからこそ、戦下の日本では

## 多様な少女の未来描いて

### 「生き方」と「体」

例えば女性の生き方という視点では、1985年から始まった『星の瞳のシルエット』においては、大学行ってしまうとや就きたい職業について語る主人公が描かれたにも関わらず、98年の『神風怪盗ジャンヌ』では主人公の少女たちは家庭に

御茶ノ水駅から徒歩1分の米沢嘉博記念図書館



明治大学付属の「米沢嘉博記念図書館」の閲覧室でマンガを読む利用者。一般利用者(18歳以上)は1日300円の入館料で2階の閲覧室が利用できます。現在、建設予定の「東京国際マンガ図書館」に先行して開館しました(東京都・米沢嘉博記念図書館提供)

掲載日	作品名	作者	発表年
1/4	リボンの騎士	手塚 治虫	1953年
1/11	ベルサイユのばら	池田理代子	1972年
1/18	11人いる！ スターレッド	萩尾 望都	1975年 1978年
1/25	星のたてごと	水野 英子	1960年
2/1	星の瞳のシルエット	終 あおい	1985年
2/8	神風怪盗ジャンヌ	種村 有菜	1998年
2/15	NANA	矢沢 あい	1999年



展示コーナー

今回の連載で取り上げたのは、数多く出版されている少女マンガ作品のほんの一部にすぎない。より多くの作品について、更には少年マンガやその他のメディアについても同様の調査・研究を進めたいと考えている。機会があればまた紹介したい。

(日本出版学会理事・大学講師) (おわり)